

魅力ある副校長職・教頭職の在り方

—学校の新しい生活様式と働き方改革—

講師：埼玉大学教育学部教育実践総合センター教職大学院教授 安原輝彦氏

担当：全国公立学校教頭会 総務部・調査部

1 はじめに

全国公立学校教頭会では、「政策提言能力を備えた職能研修団体」として、要請活動だけにとどまらず、今後の国や地方自治体の教育施策決定における重要な存在としての役割と機能を備えるために、その研修や研究活動を推進している。近年、全公教の調査結果が新聞報道等に取り上げられるなど文部科学省、各都道府県教育委員会等の教育行政、または国会議員等から全公教としての意見具申を求められることが増えてきている。このような機会を重要な好機ととらえるとともに具体的な政策提言を行うことが、学校教育全般の質的向上と副校長・教頭の地位向上につながると考える。

そこで、第6分科会では、組織として「教育施策提言能力」を発揮するために、「全国公立学校教頭会の調査」の結果報告や「文教施策・文教関連立法並びに予算措置等に関する要請」の解説を実施し、教育行政への提言・要請活動に対する副校長・教頭の認識を深める場とする。

2 分科会の進め方

- (1) 開会
- (2) 「全国公立学校教頭会の調査」報告
- (3) 「文教施策の要請」についての解説
- (4) グループ協議Ⅰ
- (5) 昼食 休憩
- (6) 講演・質疑応答
- (7) グループ協議Ⅱ
- (8) 代表グループ発表
- (9) 指導助言
- (10) 閉会

3 「全国公立学校教頭会の調査」について

令和2年度に実施した「全国公立学校教頭会の調査」の結果及び分析の報告をする。

- (1) 副校長・教頭の勤務の状況
- (2) 時間と労力を費やす副校長・教頭の業務

(3) やりがいを感じる職務 など

4 「文教施策の要請」について

令和3年度「文教施策・文教関連立法並びに予算措置等に関する要請」について解説する。

5 講演（講師：安原輝彦氏）

「魅力ある副校長・教頭の在り方」

—学校の新しい生活様式と働き方改革—

6 グループ討議について

これまで第60回札幌大会、第61回滋賀大会、第62回岡山大会（紙面発表）で「学校における働き方改革」を研究主題として、3カ年にわたり全国の副校長・教頭とともに研究主題に迫る研鑽を積んできた。各学校や地域で取り組んでいる業務改善について共有し、今後の方策を検討するとともに、副校長・教頭としていかに対応すべきかについて協議を重ねてきた。本研究会でも取組の現状や課題について、参会者同士の情報交換を行う。そして、グループ協議では、「学校の新しい生活様式」と「働き方改革」に焦点を当てて話し合いを進めていく。話し合いの柱は次の3点とする。

柱-1 各地区や各校における働き方改革の現状と課題（協議Ⅰ）

柱-2 魅力ある副校長・教頭とは（協議Ⅱ-①）

柱-3 学校の新しい生活様式における働き方改革の展望（協議Ⅱ-②）

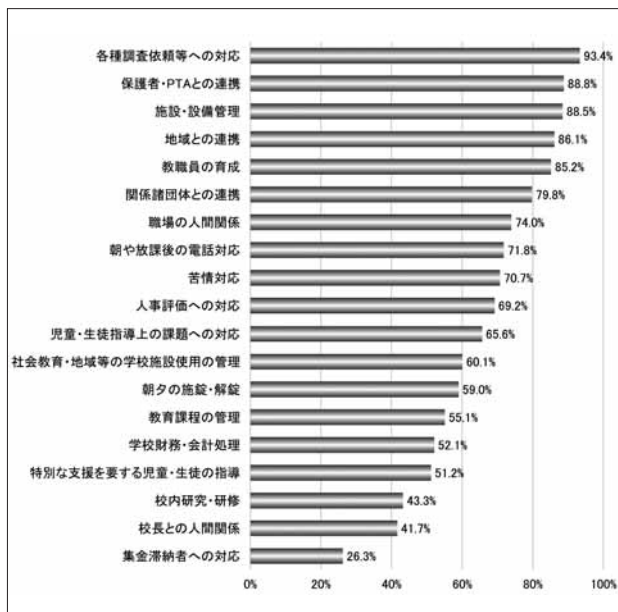
「学校における働き方改革」が進む中、副校長職・教頭職としての魅力、やりがい等について考え、コロナ禍で副校長・教頭の職務を遂行していくために必要な業務改善の具体的な取組について掘り下げる機会と捉えたい。本研究大会を通じて、副校長・教頭の資質向上が図られるとともに、働き方改革の更なる推進を期待したい。

7 参考資料

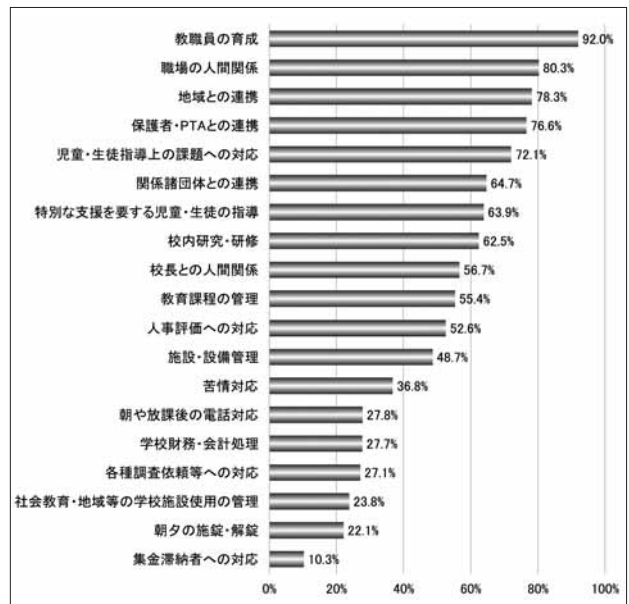
「令和2年度 全国公立学校教頭会の調査」より

「働き方改革」では、学校・教師の業務の適正化が重要な柱の一つとして据えられている。毎年の調査で尋ねている「時間と労力をかけている職務」、「やりがいを感じる職務」、「負担（疲労やストレス）を感じる職務」は、そのための貴重な判断材料である。多大な時間と労力をかけてはいても、負担感よりやりがいを感じられる職務を安易に合理化・整理してしまうことで却って副校長・教頭のモチベーションを低下させ、専門性発揮の機会を失わせる危険性に留意する必要がある。実際に副校長・教頭がある職務に費やしている時間と労力、やりがいや負担感の程度を見ると、多くの時間と労力を費やしているにも関わらず、やりがいはあまり感じられず、負担感が大きな職務がある。具体的には、「苦情対応」、「朝や放課後の電話対応」、「各種調査依頼等への対応」、「施設・設備管理」、「社会教育・地域等の学校施設使用の管理」、「学校財務・会計処理」、「集金滞納者への対応」であり、そのほとんどが既に「働き方改革」で業務の適正化の観点から見直し対象とされているものである。もちろん、そのような業務であっても、必要があるからこそ副校長・教頭が担っていることを否定できないが、教育委員会・地方自治体・文部科学省・国に対し、必要な人員配置等の更なる条件整備を求め、副校長・教頭の健康維持、専門性発揮のために、業務の適正化を推進していきたい。

【個人調査】主に時間と労力を費やしている職務



【個人調査】副校長・教頭としてやりがいを感じる職務について



他方、副校長・教頭は「教職員の育成」、「職場の人間関係」、「児童・生徒指導上の課題への対応」にも多くの時間と労力をかけているものの、大きなやりがいを感じている。このうちの「児童・生徒指導上の課題への対応」については、近年になって副校長・教頭の仕事における比重が高まってきたものである。その背景には、「課題」の量的増加と質的な多様化・複雑化に加え、教科指導や通常の学級経営で手一杯になっている教師に代わって、副校長・教頭が対応しなければならない事態が増えているからではないかと推測されるが、副校長・教頭自身、この業務にやりがいを感じていることが重要である。「職員室の担任」と呼ばれ、もともと教職員の育成・支援や働きやすい職場づくりに力量を発揮してきた副校長・教頭は、児童・生徒と保護者にとっても「第二の担任」としての役割を担うようになりつつある。勤務時間数の削減だけにとどめず、より本質的な意味での「働き方改革」を進めようとするならば、副校長・教頭の中核的業務に関わる研修要望を的確に捉え、それに応える研修機会が確保される必要がある。文部科学省、教職員支援機構、教育委員会・教育センター、大学等が実施する研修だけでなく、全公教が機能団体として、「調査」で尋ねている「副校長・教頭に必要な資質・能力」の回答を分析し、副校長・教頭のニーズに応える研究・研修活動をより一層発展させていくことが求められるであろう。